

外来植物

しんがしがわ
新河岸川と柳瀬川にはびこる
やなせがわ

NPO法人エコシティ志木・発行



イヌクイモの花



セイヨウカラシナの花



オオバタクザの花



オオカワヂシャの花

1 種類の^{がいらいしゅ}外来種が^{かせんじき}河川敷をおおいつくす

^{しんがしがわ}新河岸川や^{やなぎがわ}柳瀬川の河川敷は、街の中の身近な自然として市民の憩^{いこ}いの場になっています。

しかし、最近この河川敷に、海外から入ってきた外来種が異常に増え問題となっています。

外来種には大型のものや大群落をつくるものが多く、たった1種類でも河川敷全体をおおいつくしてしまいます。例えば、春に一面黄色の花を咲かせるセイヨウカラシナ、真夏のアレチウリ、夏から秋にかけてのセイバンモロコシなどは河川敷全体にびっしりと生い茂ります。

生物多様性の危機

このような状況になると、日本にもとからあった在来種^{ざいらいしゅ}など他の植物は光をさえぎられ育つことができません。そして、その場所で生きていた昆虫や鳥たち、小さな菌も含めたさまざまな命のつながりである「生物多様性」が失われてしまいます。それは、わたしたち人間にとっても悪い影響をあたえます。

特定外来生物と要注意外来生物

海外から入ってきた外来種が日本在来の生物や生態系^{せいたいけい}・人命・農林水産業等に被害を及ぼすのを防ぐために「外来生物法」が制定されています。

その中で、特に危険な種を「特定外来生物」に指定し、その飼育・栽培・保管・移動などを^{ぼうじよ}禁じ、防除をおこなうことを定めています。

また、特定外来生物以外でも、生態系に悪影響を及ぼす可能性のある種を「要注意外来生物」としています。

〈参考〉環境省 外来生物法 <http://www.env.go.jp/nature/intro/> 〈 〉



オオブタクサ 〈要注意外来生物〉

キク科 一年生草本 北アメリカ原産

春から次々と発芽し大きな葉を拡げ、密生すると光をさえぎり他の植物を枯らしてしまう。草丈は普通で2～3m、大きいものは4mを超える。8月下旬から開花が始まるが、大量の花粉を飛ばし花粉症の原因となる。



アレチウリ 〈特定外来生物〉

ウリ科 つる性一年生草本 北アメリカ原産

一つの株からつるが枝分かれしながらどんどん伸び長さ10mほどになる。夏にはあたり一面をおおってしまう、おおわれた植物は光をさえぎられ枯れてしまう。発芽期間が長期にわたるので一度駆除しても、また新しく発芽した株がすぐに広がってしまう。



オオキンケイギク 〈特定外来生物〉

キク科 多年生草本 北アメリカ原産

一時、道路や河川敷の緑化用草花として大量に使われたことがある。5～6月ごろ直径5～7cmの黄色の花をつける。全国的に河川敷等で野生化し問題になっているが、志木では堤防の斜面などに植えられているところがあるが、まだ野生化はしていない模様。



ハルシャギク

キク科 一年生草本 北アメリカ原産

草丈は60～120cmで、夏から秋にかけて直径3～4cmの花をつける。古くから知られた園芸植物で、全国的に広く野生化している。柳瀬川でも写真のような大きな群落を見ることがある他、住宅地の脇に生えていたりする。別の名をジャノメギクともいう。



セイトカアワダチソウ 〈要注意外来生物〉

キク科 多年生草本 北アメリカ原産

草丈2m以上になり秋に黄色い花を咲かせる。ほかの植物の成長をおさえるような物質をだして自分の勢力範囲を拡大し大群落をつることがある。志木の河川敷では最近はそのほど多くない。一時は花粉症の元凶として騒がれたが、虫媒花なので関係ないことが判明。



イヌクイモ〈要注意外来生物〉

キク科 多年生草本 北アメリカ原産

刈り残し部分に多く、草丈2mに達し、夏から秋に菊の花に似た黄色い大型の花をつける。クイモは地下に大きなイモをつくるが、本種のイモは小さい。本種はクイモの種内変異とされており、要注意外来生物にはクイモの名で指定されている。



ヘラオオバコ〈要注意外来生物〉

オオバコ科 多年生または一年生草本 ヨーロッパ原産

江戸時代末期に渡来したといわれ、現在では各地の道ばたや荒れ地、牧草地などに帰化している。葉は長さ10～20cm、幅1.5～3cmのへら形で、名前はそれによる。葉の間からのびた茎に花穂をつけるが、おしべが飛び出した様子に自然の造形美を感じる。



オオカワヂシャ〈特定外来生物〉

ゴマノハグサ科 多年生草本 ヨーロッパ原産

柳瀬川では水際で1mくらいの高さの大きな株になり、河川敷の湿った所では小さな株がたくさん見られる。春～夏に青紫色のオオイヌノフグリによく似た花をつける。在来種のカワヂシャ（準絶滅危惧種）と交雑して雑種を形成する。



セイヨウカラシナ

アブラナ科 越年生草本 ユーラシア原産

春に河川敷を一面黄色く染める菜の花。秋に発芽し、初夏に種子が熟すので夏期におこなう草刈りの有無には関係なく、大きな草丈は1.5mくらいになる。セイヨウアブラナによく似ているが、本種の葉は茎を抱かず、花も少し小さい。



ホソアオゲイトウ

ヒユ科 一年生草本 南アメリカ原産

明治時代に日本に入り、河川敷のほかに、荒れ地や畑地、市街地の空き地や道ばたでも普通に見られる。茎は直立し草丈は2m程になり、夏～秋に緑色の小さな花が密に集まった花穂をたくさんつける。茎が赤みを帯びることもある。



カラスムギ

イネ科 越年生草本 ユーラシア原産

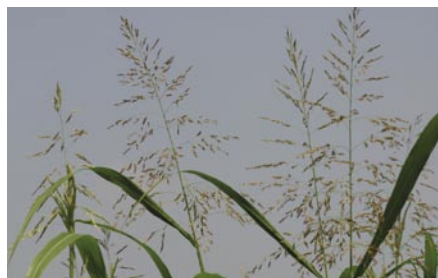
麦と一緒に古い時代に日本に入ったと考えられている。高さは1mくらいになり、長さ2～2.5cmの小穂が多数垂れ下がる。土手の斜面や河川敷に春から初夏にかけて群生する。本種に似た南アメリカ原産のイヌムギ（多年生で小穂は垂れない）も同様な場所に多い。



ネズミムギ〈要注意外来生物〉

イネ科 越年生草本 ユーラシア原産

イタリアン・ライグラスの名で牧草として明治時代に輸入。緑化にも用いられ各地で野生化している。草丈約80cm。春から夏にかけて長さ30cmほどの穂に、長さ約2.5cmの扁平な小穂を10～20個つける。カラスムギに混じって土手に群生する。



セイバンモロコシ

イネ科 多年生草本 ヨーロッパ原産

戦後全国に急速に広がる。地中に長い根を伸ばして増えるので、やっかいな外来種である。柳瀬川でも草刈りをしてすぐ伸びて2m近くに達し、土手の両側を覆って歩くのが困難なほど。夏から秋にかけて赤みがかかった穂を伸ばす。



オオフサモ〈特定外来生物〉

アリノトウグサ科 多年生草本 南アメリカ原産

観賞用として持ち込まれ、特定外来生物に指定されるまではアクアリウム用に販売されていた。川や池の浅瀬で地下茎を広げ、水上に茎葉を立ち上げる。柳瀬川の流れの緩やかな岸辺で小さな群落をつくっていることがあり、茎を抜いても根が残ると再生してしまう。



オオカナダモ〈要注意外来生物〉

トチカガミ科 多年生草本 南アメリカ原産

生物実験用として持ち込まれ、今は水槽用にアナカリスという名で販売されている。水中に群生し、長いものは1m程になり、断片から発根し増殖する。5～10月頃、花茎を伸ばし水上に白い花を咲かせる。柳瀬川では流れの速い中央部に群落をつくっている。



オオブタクサの駆除作業

オオブタクサは4月頃から発芽が始まり、ぐんぐん成長し、8月下旬には2～4m程になり開花します。この花粉が花粉症の原因になるので、この時期までの駆除が必要です。

駆除は手で抜き取りますが、あまり小さいと茎が切れやすく姿勢も疲れますが、1.2m位になると楽に抜き取れます。

一方、大きくなり茎が太くなると根ががっしりと張り、手で引き抜くのが困難になりま

す。そうした場合は根元で刈り取りますが、通常の草刈り鎌では歯が立たないので、剪定のこぎりがまで伐ると楽です。この場合はできるだけ根元で伐ること。高い位置で伐ると下から脇芽わきめが出て再生してしまいます。

種子は土の中で長生きし（土壌シードバンクという）、結実前にすべて駆除したとしても、翌年以降も発芽しますから、何年も継続して駆除することが必要です。



前年に種子を实らせた株の跡はぎっしり密生する



密生状態の中は葉が枯れて茎ばかり



密生した中央部は競い合って伸び5m以上になることもある



アレチウリの駆除作業

アレチウリは4月頃から発芽し、つる状の莖は枝分かれしながら、どんどん広がっていきます。一面をおおいつくされる前に駆除が必要です。また、一度駆除しても秋まで次々に発芽が続くので何度かの作業が必要です。

駆除は手で抜き取りますが、つるは切れやすく、また、切れたつるからすぐに再生してくるので根まで確実に抜き取る必要があります。成長が進むと、他の株とも絡み合い根元

がどこにあるか分からなくなりますが、丹念に根元を探して下さい。

あたり一面を厚くおおうようになってしまったら、鎌で一定の区画を切り、全体を引き剥がすようにするとよいでしょう。

8月下旬から開花、9月には結実が始まりますが、果実には棘があり作業は困難になります。また、土中の種子の寿命が長いので、数年にわたる駆除が必要です。



除去作業実施の直後に新たな発芽が見られる



河川敷を埋めつくしオオバクサにも這い上がる



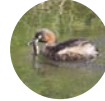
とげだらけの果実

Q なぜ外来種を駆除するの？

外来種は大群落をつくって在来種の生育を妨げます。特にアレチウリとオオブタクサの影響が大きいのですが、これらは今までの草刈りだけでは駆除できず、生育に合わせて定期的・継続的な駆除作業をおこなう必要があります。



Q 水辺の本来の姿って？



例えば、水際から土手にかけてマコモやアシ、オギ、ナズナ、ハナウドなど、長い年月かけてこの地域に根付いてきた多様な植物が育つ姿です。このような環境では、いろいろな種類の生き物が棲み、水の浄化もすすみます。

Q 駆除活動に参加するには？

現在、志木市内ではエコシティ志木と埼玉県生態系保護協会志木支部が協力して新河岸川と柳瀬川で定期的な駆除活動をおこなっています。誰でも参加できますのでお問い合わせください。電話 048-471-1338 (天田)



【裏表紙の写真】上から、在来種のムラサキサギゴケの花・魚をくわえたカイツブリ・春の野草観察会・柳瀬川風景
【参考文献】全国農村教育協会『日本帰化植物写真図鑑』

発行

NPO法人エコシティ志木

〒353-0006 志木市館 1-1-2-108 電話 048-471-1338
<http://kappa-no.net/eco-shiki/>

発行日

2010年8月7日初版 2011年8月7日再版

制作協力

(財)埼玉県生態系保護協会志木支部 <<http://blog.canpan.info/ecoto-shiki/>>

執筆・写真・企画

天田真 伊藤智明 毛利将範 山崎光久 山口美智江 (企画)

編集・デザイン

毛利将範

印刷

ふくろう社

*この冊子は埼玉県NPO基金の助成により制作しました

(初版は志木市市制施行40周年記念事業市民実行委員会が企画し、当会などの編集により2010年8月に発行)

